

『 サブちゃん 』



疎開先の茨城で、物心ついた頃から私は、犬・猫・へび（大嫌いなのですが）ネズミたちと一緒に暮らしていました。山に犬を連れてキノコを採りに行くと、その犬がウサギをくわえてうれしそうに尻尾をフリフリ私の足元に・・・・。

可哀そうなので家の庭にウサギのお墓を作って埋めたのですが、父はもったいないと言って食べてしまい、そしてその犬も村の人に食べられてしまいました。

そんな時代でした。飼っているのだかなんとか判らない動物たちとの出会いから私の動物たちのおつきあいは始まり、その後も私たち家族のまわりには、犬や猫がない生活はありませんでした。

大人になってしばらくは動物とは離れていましたが、多分淋しくなったのでしょね、「家族」という映画でいろいろな賞をいただいたお祝いにと、オスのシーズ犬を飼い始めました。「寅次郎」と名前をつけトラちゃんトラちゃんと呼んで可愛がっていました。ところが仕事が大変忙しくなり、友人、知人、仕事仲間、は

たまた犬屋さんなどに預かってもらう事が多くなり、最後には姉に「飼えないのだったらうちで面倒みるから」と言われ、最後は姉の家で姉の家族に看取られトラちゃんは逝きました。トラちゃんに最後に会いに行ったとき、歳とって目も見えず耳も聞こえず・・・でも耳を持ち上げて大きな声で「トラちゃーん」と呼んだとたん、トラちゃんは私の左肩にしがみついてきました。その時、あー私はなんて事をしてきたんだらう、もう犬も猫も飼う資格なんてない！と自分に言い聞かせました。

しばらく周りに動物がいない生活が続きましたが結婚して少し経った頃、女友達に、子供がいないんだから犬を飼った方がいいと言われ、むらむらと願望が大きくなってきました。実はほんとは飼いたくて仕方なかったのです。二人だったから飼えるかもしれない！どうしても飼いたい！でも・・・。主人はトラちゃんの経緯を知っていて、ちゃんと出来なかったのだから飼うことは絶対ダメ！と言っていました。私は釘をさされていたのです。

でも私は女友達の助言を口実に、全部私が面倒を見ますという「誓約書」を書き、むりやり主人を説き伏せ、1995年3月12日、白い柴犬の「小六三郎」クンは私たちの家に来ました。小六三郎という名前は、お父さんが禮次郎なので、お父さんより偉くならないよ！という意味でつけました。

サブちゃんが我が家に来たことで私たちの生活は一変しました。夫は完全にサブちゃんの虜になり「誓約書」なんて消えてしまいました。全て二人の生活はサブちゃん中心！！二人の仕事のスケジュールはちゃんと調整して、余程の事が無い限りサブちゃんをひとりにしない、もちろん二人で海外旅行なんてもってのほか、という生活が始まりました。

毎日同じことの繰り返し、ZZZー寝る、☀起きる、ごはん、お散歩、ウンチ、おしっこ、おやつ、たまにはシャンプー、爪切りなどなど。なんでもない、その繰り返しの中で、喜んだり心配したり。寝姿をみることや、ひとつひとつの彼のしぐさが全部可愛くて、嬉しくて楽しくて、私たちの生活は充実していました。

お留守番をさせられる時間がのびてしまい、やっと帰ってきた私たちの顔を見た途端、嬉しさのあまり、怒っておしっこをしながら失神してしまったり、ケーキを盗み食いしたのを見つけられた時のホントにバツの悪そうな顔や、私たちがちょっと喧嘩をしていると、黙って仲裁にはいってくる心配そうな顔、ホッカムリをさせられて二枚目を気取っているような顔、いろいろな彼の表情、情景、エピソードが今でも私の胸を締め付けます。

北海道の家では、冬は雪の中でスノーモービルをおもいっきり追いかけたり、春はタンポポの綿毛で何度もクシャミをしたり、きれいな空気のなかで、ああ

一幸せといいながら走り回ったり……。でも、北海道に行くために飛行機に乗るのは大嫌いで、羽田空港のロビーで泣き叫ぶサブちゃんの声はいまでも耳に残っています。飛行機に乗せるのは本当に可哀そうでした。

病気にもなりました。大きな手術もしました。そして15歳半ばかりからはだんだん歩けなくなり、そして一人では何も出来なくなりました。排泄もぜんぶ抱っこして外に連れて行き、寝たままで水もごはんも、という生活が最後の半年でした。3・11の大震災も経験しました。

そして2011年6月8日彼は天国へ旅立ちました。16年と5カ月の一生でした。私は仕事で死に目には会えませんでした。主人の腕のなかで、往診に来ていただいていた先生に看取られ旅立ちました。

「飼う、育てる、看取る、生命」

動物と一緒に暮らすということは、みんなが家族になる、最後まで責任をとる、それらを念頭に置いて一緒に生活をする、という事。

すべてサブちゃんから教わりました。すべて彼の行動が教えてくれました。

サブちゃんは友達の子や猫や鳥といっしょに箱根の山に眠っています。でも分

骨をした小さな骨壺は今でも家においてあり、北海道の家にも彼の大好きだった飛行機に乗って一緒に行ったり来たりしています。

そしてもっと小さな爪と小骨はケイタイのストラップに……。ずっと一緒です。

俳優／歌手 倍賞千恵子

3倍賞千恵子



撮影＝広川泰士／「いきいき」掲載